Silver Bullet

深闇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｉｌｖｅｒ　Ｂｕｌｌｅｔ

【Ｎコード】
Ｎ７７７４Ｐ

【作者名】
深闇

【あらすじ】
聖次という少年は伝説のハッカー。
でも昔の過去からあまり人を信じなくなっていた。
それは・・・・親に置き去りにされた過去。
ある日友人である春也が頼んできた仕事から全てが始まった――。
ホラーとファンタジーが入り混じった物語です。
タイトルの意味は「銀の弾丸」です。

ハッカーの策士（前書き）

今回はファンタジーです。
みてくださいっ！

ハッカーの策士

――少女たちが『憑き物筋』だったのか、そして『呪いのＦＡＸ』を受け取ってしまったのかは、もはや誰にも知りようがなかった。

『Ｍｉｓｓｉｎｇ　２』文末より　　甲田学人

少年はその文章を読み終えて静かにその本を閉じた。

「・・・・・・。」

少年――――神矢聖次（かみやせいじ）は無言でゆっくりとメガネを外した。

そして本を元に戻すと梯子を登って自分の寝室に足を踏み入れた。

聖次はそのベットに座り込み下を見下ろす。図書館並みにある本が本棚にきちんと収まっていた。みんなはそれを”本の虫の部屋”という。

そしてそのまま寝ようと横になろうとした時だった。

コンッ　コンッ　とノック音がした。

舌打ちをしながら起き上がり梯子を下りていく。

「はーい、どちらさん？」

そう言いながらドアを開けると聖次と同い年くらいの少年が本を片手に壁に寄りかかっていた。

「よぉ、聖次。」

「・・・・・・春也。」

その少年――――哀河春也（あいかわはるや）は聖次の幼馴染みで陸上部のチャラいエースだった。

「本、返すぞ。」

「・・・・・３００円」

聖次は本の裏を見てそう呟いた。

「うわー、ぼったくりだろそれ！」

春也がそう嘆く。が、聖次は爽やかな微笑みを返して手を差し出し

た。
「次のやつ、見たくないんだ？」
「・・・・・わーったよ！」
春也は乱暴にポケットから１００円３枚を抜き取ると聖次に投げた。
にやり、と聖次は笑い次の本を取り出した。
「聖次・・・・・お腹空いた・・・・・」
「さっき・・・・食堂で食ってなかったか？カツ丼・・・・」
呆れ顔で言う聖次に春也は抗議をする。
「うるせ。運動部はすぐお腹へんの。そこよろしく」
「はあ・・・わーったよ・・・なにがいい？」
溜息をついてそう聖次はきいた。
「うーん・・・トマトとクリームチーズのピザ。」
「無茶なメニューだな・・・・」
「と、ゆーワケでよろっ！」
そういって春也は上に逃げてしまった。
「・・・・・・つくるか・・・・」
聖次はそう呟いて作業を始めることにした。

＃＃＃

聖次には親がいない。昔、捨てられてしまった。あれは確か５歳のときだった。
「ぼくはねーおおきくなったらねーおいしゃさんになるんだー」
「すごいねー！！」
母さんは小さい頃そういって頭を撫でてくれた。聖次も嬉しかった。
・・・・・・・・再婚してから、母さんは豹変した。
聖次には暴力を振るうようになった。子供ができてイライラしたのかは分からない。
「あなたは・・・・悪い子よ。」
そういって・・・・。
ある日、母さんは珍しく買い物に行こうといった。

そして・・・・・捨てられた。置き去りにされて。

「・・・・・痛っ！」
考え事をしていて包丁で指を切ってしまった。
血が赤い玉になって、潰れて指から滴り落ちた。慌ててそれを口にくわえると鉄の味が広がった。
「大丈夫か？はい。」
なぜか春也が来て絆創膏を手渡してきた。
「・・・さんきゅ。」
ありがたくそれを受け取り巻いているうちに春也はまたうえに上がっていってしまった。
「・・・はあ・・・・・」
聖次は大きく溜息をついた。
――夕方５時――
「春也、出来たぞ。」
「・・・・んー？・・・・いいにおい」
そう言ってむっくりと春也は起き上がり大きな欠伸をした。そしてピザを見て
「いただきま・・・・・・」
とあんぐりと口を開けたとき、
『聖次ー、オレだけど開けてくれない？？』
ドア越しに声がした。しかも聖次と春也が知っている声が。
「・・・成美・・・」
扉を開けると少年ー水谷成美は聖次にそのクールな美貌を向けて立っていた。
「なんだ？本を返してメシを食いにきただけなんだが。」
「・・・・やっぱり。」
聖次はそういって本を受け取った。
「・・・・５００円」

「・・・ん。・・・たけーな・・・・・相変わらず・・・・。」
成美がそうぼやく。
お金もきっちり受け取って聖次は梯子を上がる。
すると春也が剣？な眼差しで成美を見つめていた。
「・・・〈坊ちゃん、何をしているのですか〉？」
春也は女の、しかも自分のよく知った声でそう聞かれ拍子抜けした。
「おまえなー・・・・・・いくら変装が得意だからって今そのことをやるなよ。」
「・・・・ふん。」
成美はそう鼻を鳴らし座った。
成美はまるで怪人二十面相のように声を変質させることができるので実際、男かも分かっていない。
・・・一応、男だと成美は言っているが。
「・・・・・はい、まだ余ってたから。」
といって聖次がピザを渡す。
「おー・・・さんきゅ。」
成美は受け取って食べ始めた。
聖次はパソコンを開く。
すると春也が身を乗り出す。
「なーにしてんの？」
「悠夜に頼まれた書類の整理。」
「あー・・・・・美津濃（みずの）のヤツ・・・・・」
成美のカオが苦くなる。春也の目が爛々と光っている。まるでプレゼントを待つ、子供のように。
そして一言
「聖次・・・頼む。・・・アノ件・・・・本気だから。」
と言ったのだ。
「！・・・あの話は・・・断っただろう？」
苦笑いをして聖次はそう答えた。が、春也は諦めなかった。
「頼むよー・・・・分かった・・・今度、新しいパソコン買ってあ

げるから・・・・」
にや、と聖次が不敵に笑う。
「オレがそうゆーの嫌いだって知ってるだろう？」
「だけど・・・オレは諦めないよ。」
聖次の蒼色の双眸と春也の橙色の双眸が絡み合う。
・・・・・折れたのはやはり聖次の方だった。
「分かったよ・・・今度の用件は？」
少し溜息をついて聖次はそう聞いた。
春也がニヤリと口の端を上げる。
「うーん・・・・・哀河家の秘書、堤智香子（つつみちかこ）のパソコン。・・・アイツ、オレの今の親から１００万ぐらい横領してるの。だから嫌がらせだよ。・・・・情報漏洩（じょうほうろうえい）専用のウイルスある？」
「・・・・・あるよ。それに・・・・許せねえしな。そーゆーの。」
聖次がそういって引き出しにズラリと並んでいるＳＤメモリーの中からそれを取り出すとパソコンに差し込んだ。
カチカチとボタンを押していた聖次の手が止まる。ハッキングを終えたのだろうか？
「・・・・・・・・・・・でた。・・・・・・ロックしてあるんだけど？」
春也をみると紙が渡される。横から成美が覗いてくる。
「ＵＳＯ８００？？・・・・アホなの？こいつ。」
「成美・・・・声と口調が・・・女のまま。」
「あ、あー・・・あ・い・う・え・え・お・あ・お・・・・これでいいか？」
「・・・あー・・・・・うん。」
聖次はいつも聞いていてアホだと思うが・・・・・まあ仕方ないのだろう。
「んで・・・・・・これを・・・・・入った。」

「さすがは聖次・・・仕事が速いね。」
「・・・で？どうすんだ？」
聖次が聞くとニヤ、と春也が笑って
「親父のパソコンに送っちゃって。」
といった。
「・・・・・・春也。」
「ん？なーに？？」
「黒いのな・・・・・・・お前」
成美がそういって溜息をつく。
「・・・・まあな。今回の親はオレによくしてくれるからな。」
ふ、と微笑みを浮かべると春也はピザにかじりつく。
「じゃ、イッチョやりますかー」
聖次がそういってカチ、とＥｎｔｅｒキーを押した。
「おしまい。」
「・・・ありがとーな」
に、と春也が笑った。

ハッカーの策士（後書き）

見てくださりありがとうございました。
これからも書きたいです。

ありふれた日常（前書き）

おもしろく書けたのでよかったのですが大変でした。

ありふれた日常

・・・・・・・・・・・・・

春也にとって今の親は大変すばらしい存在だった。
今までの親なら春也を奴隷のように扱っていた。その度に逃げ出していた。
しかし、今の親はそんなことをしない。優しく春也に接してくれている。
だから春也は今の親を傷つけることは許せないのだ。
・・・・・話は変わるが、聖次と出会ったのは１０年前だった。
春也と聖次がまだ５歳の頃、施設に元々預けられていた春也が
「なあ、お前いくつ？」
と聞いたときからだった。
あまり笑わない無愛想な奴だ、と周りの大人から言われていた聖次は本当に笑うことが少なかった。
そばにいた春也でも５回ほどしか見たことがない。
けれどシスターが亡くなって人と触れる様になってから笑うことが多くなった気がする。
もしかしたらシスターが原因だったのかも知れない。
そんなことも思うが今となってはもうどうでも良かった。
聖次がピザの残りを片付けている時、春也はそんなことを思いながら部屋の備え付けのパソコンをいじっていた。

・・・・あの後。

聖次はさっきのパソコンをウイルスを送ってぶっ壊した。
「本当によかったのか？」
と成美に聞かれたが聖次は
「・・・なにが？」
と聞いた。
「パソコン。・・・大事な物は入ってなかったのか？」
「全然。要らないものばっかだったし。」
「・・・・そっか・・・ならいいけど。」
平然と答える聖次に成美は多少の疑問を持った。が、その疑問もすぐ消えた。
「だって僕、重要なもんはちゃんと入れてるもん・・・・ＵＳＢに。・・・それに超高級パソコン買ってくれるしなー春也が。」
クスリと意地の悪い笑いを浮かべ聖次が春也に視線を向けたのだった。

「・・・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・」
約束はしたものの、ちゃんとした物を買えるか分からず、春也は大仰な溜息をついた。
「春也、ちゃんと約束は守れよ？？」
ニヤリ、と成美が聖次の声でそう言った。
「このやろー・・・・」
春也が低くそう呟く。が、聖次と成美はものともせずニマリと笑う。
春也は溜め息をこぼすことしかできなかった。
「・・・・なぁ、聖次。」と声をかけたのは成美だ。
「んー？」
何か悩み事があるのか、声音が低く聞こえた。
「あのさ・・・・俺、最近おかしな夢見るんだけど・・・・どうすればいい？」

ピクリ、と一番早く春也が反応した。
「・・・・・おかしな夢？」
聖次はそんな春也の態度に疑問を感じたがあえてムシし、成美に問いかけた。
「・・・・・あぁ。」
成美は小さく頷く。
「それは・・・明日にしないか？もうこんな時間だしな・・・・」
静かに聖次が時計を指差した。気が付いてみると、午前０時を回っている。
「・・・・あぁ。・・・そうだな・・・聖次・・・今日、お前のとこ泊めてくれないか？・・・怖いんだよ・・・自分の部屋なのに・・・・。」
はは、と自嘲気味に笑いながら成美はそう訊いてきた。
聖次はそんな成美が可哀想に思い、
「いいけど一泊・・・・１０００円な。絶対払えよ。」
といった。
すると春也が
「お、オレも泊まっていいか？」
と戸惑いがちに聞いてきた。
「お前の場合２０００円な。」
ニヤリと笑いながら聖次が言った。
「・・・・・ぼったくりーーーーーー！！！！！！」
春也がそう嘆いた。
２人がプッ、と吹き出し笑い出した。
「～～～～！！笑うなっ！！！」
春也がそう怒ったが、２人は笑ったまま腹を抱えた。
「笑うなって～！！」
「ははははっ・・・・で・・・・・泊まんだろ??」
笑いをこらえながら聖次が春也に聞いた。
春也はこくりと頷いた。

「・・・・・１５００円にまけてやる。」
春也がガッツポーズを心の中でつくった。
ニッ、とその心を隠すように春也が笑った。聖次は少し苦い顔をしていたがやがて溜息に変わった。
「成美と春也はここで寝ろ。」
「・・・・聖次は？？」
春也にそう聞かれると聖次は下を指差した。なんと自分の寝室が階段の下にあるらしい。
「さいですか・・・・・・。」
「風呂はあそこ。まず２人のどっちかから入れ。」
指をさされた場所には確かに湯船とシャワーがあった。あったかそうな湯気が出ている。
「春也。」
成美が声を掛けてきた。言いたい事は分かっている。
「あぁ。せーの！！」
「「じゃーんけーんポイッ！！」」
結果は・・・春也がグー、成美がチョキ。
「・・・・・やったー！はじめてこいつに勝った！！」
春也がそう声を上げ飛び跳ねた。
成美はニヤリとした。実は成美はわざと春也に負けてやったのだ。
あんなに喜ぶとは思っていなかったのだが。おかげで、成美の悩みが半減された気がした。

ありふれた日常（後書き）

誤字脱字があったら知らせてください。

救いの手。（前書き）

ビミョーなところできれてごめんなさい。
楽しみにされていた方もいない方も、楽しんでいただければ幸いです。
どうぞ（＾○＾）。

救いの手。

聖次は正直に言うと春也と成美に手を焼いていたがそれでも2人が嫌いではなかった。
ただ、聖次は見守りたいだけかもしれないが。
先に勝った春也はゆったりと長湯をしているようだ。
一時間は経つだろう。
「成美ー・・・起きてる??」
「当たり前だ。オレだって早く入りたいがな・・・・」
「諦めろ。」
「・・・・・やっぱ、部屋戻るかなあ・・・」
溜息とともに成美が言う。
「あんだけ怖いとか言ってたのにー??」
軽く聖次があしらう。すると今度は更に大仰な溜息をついて成美は風呂に声を掛けた。
「おーい!いい加減上がってこねーとおこんぞー!!」
「・・・・・・・。」
「・・・・春也?」
返事がない。
・・・・・嫌な予感がしてならない。
成美が様子を見に行こうと扉を開けた
聖次がはっとして脱衣所に駆け込んだ。
「・・・・・・あ、やべっ!!!・・・・ごめん成美。風呂場に・・・剃刀おきっぱだった・・・!!」
「はやくいえっ!」
がらっ!と勢いよく扉を開けるとやはり春也は剃刀の刃を手首に当てようとしていた。
「・・・・はるやっ!」
聖次が鋭く叫ぶ。

はっ、と春也が振り向いた。剃刀をとっさに隠す。
しかしムダなようだ。
「・・・・まだ治らねぇようだな・・・・」
聖次は剣呑な表情で春也を見下ろした。
「・・・ち、違うよ・・・聖次、ご・・・誤解だって！！」
「誤解？」
成美が剃刀を奪い取る。
「これの・・・・・・どこが？？」
「・・・・・・・。」
春也は無言のままだ。
「ま、これ以外刃物なんて台所にしかねぇからいいけど・・・・ゆっくり浸かってこい。」
聖次は成美からその剃刀を抜き取ってそういいながら去った。
「春也・・・・考えろ。」
成美もそういってその場を去った。
「ごめん・・・・。」
春也は二人の後ろ姿にそう謝った。

＊＊＊

春也が上がってくると成美と聖次はもう寝ていた。
（・・・・オレだって治ったと思ってたさ・・・）
春也はそう思いながらテレビ前のソファにドカッと腰を下ろした。
春也は昔から一種のうつ病だった。
正直に言うと刃物がダメだった。それだけだった。なのにどんどん血を見たいと思うようになって更には自分の腕をリスカで傷つけるようになってしまった。自覚はない。というか刃物を見ると頭が真っ白になるのだ。
「・・・・ああー・・・・」
最悪・・・と心の中で呟く。

台所に行くとドアに南京錠がつけられていた。
「・・・・・用心深い奴。」
冷蔵庫から自分の常備品であるビールを2本取り出して再びソファに座った。
ビールのふたを開けると一気に煽る。
ふぅ…と息をつきソファにもたれる。
そして静かに昨日見た夢について考えた。

＊＊＊

春也が見た夢は孤児院の最初のシスターの夢だった。春也が一番・・・恐れているものだ。
まだ春也たちが小学生の時のことだ。春也はそのシスターに毎日裸で一時間近く、風呂場で正座をさせられていた。
「シスター…やめて…下さい…」
春也の声はシスターの耳には届かない。
シスターは暢気に煙草をふかしているのだ。
「シスター…ねぇ、シスター…」
「勝手に立ち上がるな！」
「！！」
グスン、と泣きそうになりながらまた座り直す。
赤ん坊の頃からここに住んでいた春也にとってシスターに逆らうことは、してはいけないことだった。
そこにシスターは漬け込み毎日春也ばかりいじめていたのだ。
―――それを救ったのは聖次と成美だった。
「失礼します。」
「ちーす！」
「あら、聖次君と成美君…どうしたの？」
「春也がいないからここにいるかなって…」
答えたのは成美だった。

シスターはとっさに風呂の扉を閉めた。
・・・・しかし、それが仇となった。
「春也！いんだろ？」
「！！！」
春也は二人を巻き込まないために押し黙る。
だが聖次は気付いていた。
「シスター…そこ通して。」
「なぜ？まだお風呂の時間ではありませんよ？」
シスターの額に汗が浮かぶ。聖次はそれで確信した。
「成美。」
「おぅよ！くらえっ！」
成美が応えてシスターに催涙ガスを吹きかけた。
「あぁ！！目が、目が！！・・・・この野郎共！！」
シスターが目を押さえて喘ぐ。成美を捕まえようともがくがなかなか捕まらない。
「春也！」
その隙に聖次が扉を開けた。やはり春也はそこにいた。
春也は大きく目を見開いた。
「どうして・・・・・オレなんかを助けるんだよ。」
春也がそう訊くと聖次は
「当たり前だろ？俺らは同志だ。」
と満面の笑みで答えた。

・・・あのときの記憶は今も鮮明に残っている。
「つーか・・・・聖次も成美も起きてんだろ？」

ビールをチビチビと今度は舐めるように味わって春也は二人に呼びかける。
すると数秒後
「・・・・お前、色々と分かるようになったらしいな。春也。」
と起き上がったのは聖次だった。
フッ、と笑い肩をすくめ
「まあね。」
と春也が言う。
「ビール、オレにもくれ。」
「んー。」
冷蔵庫からもう二つ取り出すと一つは聖次に、もう一つは狸寝入りを決め込むらしい成美に投げた。
「・・・今ので絶対振れたぞ・・・」
聖次は呆れながらそれをベッド上のマイコップに手を伸ばした。
いい音と共にコップにビールが注がれる。
春也はニヤリと笑いながら
「成美〜・・・・起きろよ〜・・・・寝てねーのバレバレ〜」
といった。
しばらくして成美が起き上がる。むすっ、とした顔で。
「風呂、入ってくるか？」聖次がそういい成美が頷く。
『聖次。』
口パクで成美が呼びかける。
「？」
首をかしげる。
『もしもオレに何かあっても構うなよ』
「・・・・・・」
こくりと頷いた。
何であろうと、成美が頼むなんて珍しいからだ。
「じゃ。入ってくる。」
「んー。」

春也はきっといまだに気がついてないだろう。
さっきいった成美の言葉のいみを。
「せーじ！！ビール寄越せ！！」
春也がそういうので聖次がビールを手渡した。
春也がそれを一気に煽る。
（やけになっていないだろうか・・・）
そう考えながら聖次は訊いた。
「春也。お前、成美と同じ夢見たんじゃないのか？」　確証はなかった。
だが、その言葉で春也がピクリと反応を示した。

・・・ビンゴだ。

「ちょっとごめんな。」
そして聖次が取り出したのは細長い注射器だった。
酔っている春也でもわかった。
大人しく右腕を出した。
「・・・わりぃ。」
鎮静剤だとわかっている。
春也のために聖次が調合した薬だ。
「謝るな。・・・とりあえずこれやったら寝ろ。」
聖次は薄く微笑んだ。

救いの手。（後書き）

いかがでしょうか？
駄文ですみません。（ー ー；
最後まで読んでいただきありがとうございました。

夢現ーユメウツツー

成美が無事上がってくるのを待ってから聖次は眠りにつこうと思い待っていた。
春也はさっきの薬のおかげか小さく細い息を吐いて静かに寝ていた。

数分してガチャリとお風呂の扉が開きジャージ姿の成美が出てきた。
「・・・・・なんとも、なかったか？」
意識がうつらうつらしながら成美にそう訊くと薄く微笑んで頷いたのでほっ、として聖次はそのまま目を閉じた。

＊＊＊

聖次は夢を見る。

静かに。ゆったりとした海の中にポツリと1人。

あぁ、夢だ。そう気がつくのにそう時間は掛からなかった。

このまま流されていようと思っていた。

だが、

「・・・・る・・・・・・輝（てる）・・・・」

「！！」

あまりにも生々しい記憶の声がしたため、聖次は立ち止まった。

それは紛れもない、母親の、愛おしそうに呼ぶ聖次の、本名。

「・・・かあ・・・さん？」

聖次は振り返らずそう訊く。

「・・・・・大きくなったわね輝・・・本当に。」

後ろから抱きすくめられる感触と共に、そう声が聞こえた。

そして、その声を聞いた瞬間に聖次の中でプツリと糸が切れた。

「・・・・・ハッ。・・・アンタは母さんなんかじゃないな。オレの母親はもうとっくの昔に死んだんだ。・・・・死にたくなければ消え失せろ。今すぐに。」

そういい聖次はその手を振りほどいた。

『・・・いやはや。私はやはり君を舐めていたな、輝。』

母親の声と中性的な男の声が重なり手が塵となってポロポロと崩れていった。

あとに残ったのは手に残る仄かに暖かな感触の輝く黒真珠だった。

＊＊＊＊

「・・・・・。」

そんな夢を見て聖次は目を醒ます。

春也達はまだ寝ていたが額には聖次と同じようにビッチリと汗が浮かんでいた。

聖次の手には黒真珠のブローチがあった。

魔方陣のような形のブローチは気味が悪かった。

「今何時だ・・・？」

そういい時計を見ると時刻は９時半を回っていた。

「・・・・・完全に遅刻だな・・・。」

いつの間にか聖次は冷静さを取り戻していた。

そしてうなされている２人を起こそうと身体を起こした。

するとズキン、と頭を割られる様な感覚が聖次を襲った。

（――――まだ・・・頭痛がするのか。）

「・・・・。」

無言でそれに１人で耐え、何とか持ちこたえようとギリ、と奥歯を噛み締める。

「・・・・・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・。」

何とか持ちこたえられたらしい。溜息をついてベットを降りた。

「春也、成美。・・・・起きろ。もう９時半だぞ・・・？？」

肩を揺さぶると寝ぼけながら２人が起きる。

「う～～ん・・・・・・・・いま、なんじって・・・・？」

春也がそう言ったので

「９時４５分。」

と聖次がいってやった。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。あきらめるか。」
あんぐりと口を開けた後、静かに2人が口を揃えてそう言った。

＊＊＊＊
ここは聖次達が通っている大学院内の理学部の研究室。
「遅れた理由を言ってみろ。神矢、哀河、水谷。」
若くして准教授についているイケメンで秀才な青年―――美津濃悠夜(ミヅノユウヤ)はそういってニヤリと笑って見せた。
そのイケメンな顔はクマで今台無しになっていた。
「・・・・ただの寝坊に過ぎません。それにしてもせんせーも眠そうですね。」
淡々と聖次が答える。
「・・・・・・・・・・・・きのー変な夢見たの。ほっとけ。」
くあぁ、時の抜けたような欠伸をしながらそう答える悠夜。
「・・・・・・・・・・・・もしかして、ひょっとするとその夢に思い出したくない人が出てきませんでしたか？」
「「「！！！」」」
聖次がその言葉を言った瞬間3人の行動が固まった。

「・・・・ビンゴですね。オレも見たんです。」
聖次が笑いながら例の宝石を取り出した。

夢現ーユメウツツー（後書き）

毎回駄文でゴメンナサイ！！
でも頑張って書くので見届けてくだされば嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7774p/

Silver Bullet

2011年10月13日16時51分発行